

大正十年末ニ於ケル鑛區數ハ鑛業ニ在リテハ三百十二其ノ坪數二億七千八百三十二萬〇二百十五坪ニシテ之ヲ前年末ニ比スルハ六十八鑛區六千五百八十八萬五千〇二坪ヲ増加シ砂鑛業ハ十一鑛區十七萬七千坪及延長十六里ニシテ前年末ニ同シ左ニ前年對照表ヲ示ス

試掘鑛區對照表

年次	區別	試掘鑛區對照表												
		石炭	石油	金銀銅	銅鐵	金銀鐵	硫化鐵	金銀銅	滿備水銀	鐵	硫化鐵	銅	亞炭	計
大正九年	鑛區	一八、五九、九三	一	一、八五、〇〇	一	九〇、〇〇〇	一	三、七三、三三	一	一、七四、〇九	一	二六、一五、一一	一	一九、四四、六五
	面積	二七、〇五、〇六	三、八、三六	一〇、三三、九六	九〇、〇〇〇	三、七三、三三	一、七四、〇九	七三、一五、一一	二六、一五、一一	一九、四四、六五	二六、一五、一一	二六、一五、一一	二六、一五、一一	二六、一五、一一
同十年	鑛區	一七、〇五、〇六	一	一、八五、〇〇	一	九〇、〇〇〇	一	三、七三、三三	一	一、七四、〇九	一	二六、一五、一一	一	一九、四四、六五
	面積	二七、〇五、〇六	三、八、三六	一〇、三三、九六	九〇、〇〇〇	三、七三、三三	一、七四、〇九	七三、一五、一一	二六、一五、一一	一九、四四、六五	二六、一五、一一	二六、一五、一一	二六、一五、一一	二六、一五、一一

探掘鑛區對照表

年次	區別	石炭		計		年次	區別	石油		計	
		面積	鑛區	面積	鑛區			面積	鑛區	面積	鑛區
大正九年	鑛區	三、六九、四六	一	三、六九、四六	一	大正十年	鑛區	三、六九、四六	一	三、六九、四六	一
	面積	三、六九、四六	一	三、六九、四六	一		面積	三、六九、四六	一	三、六九、四六	一

砂鑛區對照表

年次	鑛區	砂		金		年次	鑛區	砂		鐵	
		面積	延長	面積	延長			面積	延長	面積	延長
大正九年	鑛區	一〇	延長	一〇、〇〇〇	十六里	大正十年	鑛區	一〇	延長	一〇、〇〇〇	十六里
	面積	一〇	延長	一〇、〇〇〇	十六里		面積	一〇	延長	一〇、〇〇〇	十六里

鑛產並稼行鑛區

同十年	延長	一〇、〇〇〇	十六里	延長	一〇、〇〇〇	十六里
-----	----	--------	-----	----	--------	-----

稼行中ノ鑛山ハ何レモ皆石炭ニ屬シ大正十年中ニ於テハ六炭鑛ノ稼行ヲ見其ノ鑛產額十一萬五千二百五十五噸ナリ之ヲ前年ノ十五萬四千二百九十二噸ニ比スレハ三萬九千三十七噸ヲ減ス之レ野田寒炭鑛新ニ開坑シ四千五百八十三噸ノ出炭ヲ見川上炭鑛ノ設備漸次改善ノ緒ニ就クト共ニ前年ニ比シ一萬二千九百二十九噸ノ出炭増加ヲ見タルモ登帆炭鑛カ後半期以後休業セル爲一萬六千八百二十八噸及安藝川(泊居)大榮兩炭鑛カ山火ノ爲坑外諸設備ノ大部分延燒ノ厄ニ遭遇シ殊ニ安藝川炭鑛ハ火災坑内ニ及ヒ採炭作業當分休止ノ止ムヲ得サル状態ニ陥リタル等ニ因リ前述三萬九千餘噸ノ減少ヲ見タリ左ニ表

鑛產額對照表

(石炭)

年次	川上炭鑛	泊居炭鑛	東白浦炭鑛	登帆炭鑛	大榮炭鑛	野田寒炭鑛	計
大正九年	五二、二四	三三、二四	六、八四〇	三九、九六	三四、三〇	一	一五四、二九
同十年	四〇、〇三	六、三一一	六、一〇四	一三、一三六	一〇、九七六	四、五八三	一五、一五五

稼行鑛區現在表

名稱	所在	鑛種	面積	著手年月日	鑛業權者	備考
川上炭鑛	豐原郡豐北村大字川上	石炭	三、六九、五〇	大正二年十一月二十八日	三井鑛山株式會社	

附錄 朝鮮、臺灣、樺太ニ於ケル鑛業



泊居炭礦	泊居郡泊居町大字元澤	七七、七〇	大正三年十月二十二日	樺太工業株式會社	採掘請負人	國有炭礦
東白浦炭礦	榮濱郡白縫村大字東白浦	七〇、七三	大正三年一月五日	樺太炭礦株式會社		
登帆炭礦	元泊郡帆寄村大字登帆	七三、七五	大正五年八月一日	登帆炭礦株式會社		
大榮炭礦	泊居郡名寄村大字名寄	七六、七七	大正七年六月二十二日	樺太工業株式會社		
野田寒炭礦	野田寒郡野田寒村大字野田寒	一〇〇、〇〇〇	大正九年八月十日	王子製紙株式會社		從來休業中 ニアリ

事業擴張セル鑛山概況

川上炭礦 石炭

位 置 豐原郡豐北村大字川上  
鑛業權者 三井鑛山株式會社

川上炭田ハ樺太ニ於ケル最モ重要ナル中央部炭田即チ内淵炭層ノ南端ニ接シ合炭層ノ厚サ約二千尺ニシテ其ノ間十五層ノ石炭層ヲ算ス之ヲ下部ヨリ數ヘ各層ノ石炭厚ヲ表記スレハ

一番層 十 尺 二番層 四尺六寸 三番層 二尺五寸 四番層 四尺二寸 五番層 一尺八寸  
 六番層 五尺四寸 七番層 四 尺 番外層 四尺五寸 八番層 三尺五寸 九番層 二尺三寸  
 十番層 一尺八寸 十一番層 四尺三寸 十二番層 九 寸 十三番層 四 尺 十四番層 四 尺

石炭厚合計五十七尺八寸ニシテ現今採掘セルモノハ一、二、七、八番層及番外層ノ五層ニシテ其ノ石炭厚二十六尺六寸トス炭層ハ西ニ單斜シ南部ニ於テ四十五度北部ニ三十五度乃至三十度ノ斜角ヲナセリ地勢南ニ高ク此ニ低下セリ炭層露頭ノ最高地點ハ海拔千二百尺ニシテ墜入坑道準以上三百八十尺ニ達ス走向ハ正南北ニシテ鑛區ノ延長八千間ニ亘リ殆ント斷層等ノ變化ナクシテ連續セリ本炭坑ノ出炭額ハ一ヶ年六、七萬噸ニシテ其ノ販路ハ豊原、大泊ノ製紙工場及樺太廳鐵道用炭ニ限ラレタリ然ルニ島内石炭ノ需用ハ逐年増加シ多量ノ北海道炭ヲ移入セルモ尙ホ一般ニ石炭ノ供給普及セズ

不濟經ナル薪炭ヲ使用スル現情ナリ從來ノ川上採炭所ハ海拔九百尺ノ高所ニ於ケル炭層ノ露面ヨリ直チニ二三ノ採炭坑道ヲ掘鑿シ地表ニ近キ炭層ヲ採掘スル姑息ナル稼行法ニシテ多量ノ出炭ニ適セス又樺太廳鐵道與川上驛(大泊ヲ隔タル約四十哩)マテ延長七哩半ノ輕便運炭鐵道ハ冬季運轉ニ支障多ク從來ノ採炭量ヲ以テシテ屢々山元ニ石炭ノ澁滯ヲ免レサルナリ斯クノ如ク本炭坑ハ頗ル多大ナル埋藏炭量ヲ空シク死藏スルニ過キサリシカ大正十年度ニ於テ擴張工事ニ著手シ近ク年額十五萬噸將來三十萬噸ヲ出炭シ島内ノ需用ノ増加ニ應セムトス擴張工事ノ概略左ノ如シ

墜入大坑道ノ掘鑿 十年度ニ於テ川上川畔ノ低地ニ於ケル合炭層ノ下部地層ニ坑口ヲ開鑿シ炭層ノ走向ニ對シ直角ノ方向ヲ採リ掘進ヲ續ケ坑口ヨリ千八百二十尺ニシテ一番層ニ會シ二番、三番、四番層ヲ過キ坑口ヨリ引立(十一年四月末)ニ至ル掘進二千尺ニ達ス前途掘進二千八百尺ニシテ全部炭層ヲ橫斷スル豫定ナリ將來本坑道ヨリ分岐シ合炭層ノ下部岩層中ニ走向ニ沿ヒ「ストーン、ガレリー」ヲ掘進シ適當ナル間隔ニ「クローズ、カット」ヲ掘進シ合炭層ヲ橫斷シ採炭ヲナサムトス「ストーン、ガレリー」ヨリ選炭場ニ至ル運炭ハ「トロリー」式四噸二十馬力電氣「ロコモチーブ」ヲ使用スルモノトス掘鑿ニハ米國「サリバン」會社製「ウオーター、ライナー」式鑿岩機ヲ使用シ墜入坑内ニ於テ電動空氣壓搾機ヲ運轉ス又掘鑿中ノ坑内通風ハ「ルーッ」式煽風機及數臺ノ局部煽風機ヲ使用セリ

選炭場ノ新設 十年度ニ於テ新設ノ計畫ヲ定メ目下工事中ニシテ大正十二年度ニ完成スヘキ豫定ナリ一日ノ扱炭量五百噸ニシテ網孔一時二分ノ「スキング、スクリーン」ヲ以テ塊炭ヲ篩別シ塊炭ハ「ビツキング、バンド」ノ上ニ於テ手選シ「コムベアー」ニヨリ貯炭庫ニ送ラル一時二分ノ一以下中、小塊及粉炭ハ「コムベアー」及「エレグエーター」ニヨリ貯炭庫ノ上段床面ニ連ハレ更ニ「ブッシュ、コムベアー」ニヨリ庫内ノ隨所ニ送リ貯炭セラル將來中、小塊炭ヲ選別スヘキ水洗機新設ノ豫定ナリ選炭場建築ノ總面積ハ四七二・九平方米ニシテ鐵筋混凝土造トス貯炭庫ハ其基部ヲ鐵筋混



凝土造トシ總面積二三三平方米貯炭量一千二百噸トス貯炭庫底部兩側ニ於ケル「シュート」ヨリ直ニ鐵道炭車ニ積込ミ鐵道本線ニヨリ搬出スルモノトス場内ニ使用スル電動機ハ五臺ニシテ計六十馬力ナリ

發電所ノ擴張 從來ノ發電所(出力二〇〇キロ、ヴォルト、アムペアー)ヲ廢シ運炭電車、煽風機及運炭機等ノ運轉ノ爲目下蒸氣發電所新設中ナリ新發電所ノ出力ハ六〇〇キロ、ヴォルト、アムペアートス

鐵道及電車線ノ新設 樺太廳鐵道奥川上驛ヨリ新設運炭場マテ延長六哩ノ鐵道ヲ新設シ及堅入大坑道内ヨリ前記運炭場マテ新ニ電車線ヲ設ケ從來ノ輕便軌道ニヨル運炭ヲ廢止セムトス鐵道ノ建設ハ樺太廳鐵道ノ規定ニ準シ十年度ニ於テ起工シ十一年中ニ完成ノ豫定ナリ

本炭坑ニ於テハ先年來鮮人鑛夫ヲ使用セシニ其ノ成績良好ナリ目下百十名ノ鮮人鑛夫ヲ使役セリ

大正十一年十二月廿三日印刷  
大正十一年十二月廿六日發行

定價 金四圓貳拾錢

### 農商務省鑛山局編纂

發行人 三田尾松太郎  
東京市牛込區加賀町一丁目二十五番地

印刷者 赤羽正己  
東京市芝區愛宕町三丁目二番地

印刷所 東洋印刷株式會社  
東京市牛込區加賀町一丁目二十五番地

發行所 國產時報社  
電話番町七四〇番  
振替東京三三二〇三番



終